

## 第4分科会

# 大学の授業における 「所属感・居場所」づくり

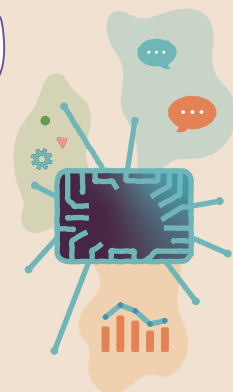
### 報告者

土居 洋平 氏 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 教授

中尾 覚 氏 龍谷大学 心理学部教務課 職員

### コーディネーター

小正 浩徳 氏 龍谷大学 心理学部 准教授



---

---

## 〈第4分科会〉

# 大学の授業における「所属感・居場所」づくり

コーディネーター

龍谷大学 心理学部 心理学科 准教授 小正 浩徳

---

---

### ○本分科会のねらい

本ワークショップの大きなねらいは、授業をはじめとした学生たちの大学生活における「所属感・居場所」について参加者同士でアイデア・イメージを集約し、学生の中退予防について考え、今後の学生への教育につなげることである。

そこで、学生が自ら大学に来たい、講義や課外活動に続けて参加したい、そう思えるような大学としての工夫ということをテーマとした。このテーマをふまえたワークとして、参加者のアイデアを付箋紙に書き出し、それを模造紙に張りまとめることでアイデア・イメージの集約を行いつつ、参加者同士で考えられたことから討議するものとした。

### ○報告の概要

参加者同士のワークに先立ち、コーディネーターである小正がまず趣旨説明を行った。その中で、学生の中退予防につながる可能性のある要因として、「大学帰属感」があり、この「大学帰属感」に影響を与える3つの要因として「友人関係満足感」、「教員サポート感」、「学び満足感」があることなどを報告した。

続けて、中尾覚氏（龍谷大学心理学部教務課 課員）が、龍谷大学心理学部の学生有志によるチーム作りを報告した。このチームは「team 彩」と学生により命名された。また、コンセプトは「学生同士の学年の垣根を超えた交流学生主体の活動団体」としてそこには「たて×よこ」のつながりを創出であった。こうしたなかで、学生にとって「いつものメンツがいる」という安心感の中、team 彩が学生の居場所としての機能を果たしていることが話された。中尾氏は、大学側がチーム作りを先導し学生がそれを居場所としてより発展させていくことの有用性が示す一方で、学生が、自身の「自己責任」のもと自ら主体的に学び成長していく場所として、大学を活用し居場所へとすることができるような力を備え、それを発揮できているのかどうかということについて指摘した。

そして、土居洋平氏（跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 教授）が、授業や地域との連携を通じた「居場所」作りの実践・研究を報告した。その中で、「居場所」作りにおいて「関わりの機会を増やす／一つ一つの関わりを太くする」ことを通じて学生が「ここに居たい」と思えるような取り組みを念頭に置いていること、具体的には授業の中で「機会の量・質の向上」として学生と教員そして学生同士のコミュニケーションに意識を置き、そこで生じるコンフリクトもまた教育の一環としての対応を行っている。また、大学の構内に学生が溜まることができる場所（物理的な居場所）を作る工夫や、大学外つまりは地域の中に学生が溜まることができる場所（物理的かつ心理的な居場所）につなぐ工夫についても報告された。この地域における「居場所」に学生が赴き、地域の人々との関わりの中から、学生自身の自己有用感を育み、学問的な探求心を育てることができた事例も報告され、居場所の教育的な効果が示された。

土居氏は、学生の居場所につながる「関係機会を増やす・関係性を太くする」ことの取り組みにおける課題として、学生にその機会を提供したとしてもそこに呼応する学生と、呼応しない学生という二極化があることが示された。また、その呼応しない学生がいるからといって機会の提供を広くアナウンスしなくなることは、学生に対する関わりが少なくなり、結果、学生が寂しさをより募らせることにもなりかねないことを指摘した。このバランスの難しさをどう教員側が理解し、アプローチするのがポイントになるとの見解を示した。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

上記のように大学による実践報告がなされた後、参加者同士によるワークが行われた。ここでは、大学教員と事務員によるグループが6つ、学生によるグループが1つ作られ、次の課題のもと、検討を行った。

課題は、『「学生が所属意識をもてる場所・団体」、「大学における「居場所」』という2つの事柄からイメージされたことを各自が付箋紙に書きだし、それをグループ内でまとめ、「大学における「居場所」』について検討すること、である。

約1時間ほどのグループワークを行い、最後に、学生グループと、大学教員と事務員グループから1グループより検討結果の報告が行われ、全体でシェアされた。

なお、ワークショップ後、各グループでまとめられたものを確認したところ、「場所としての居場所」、「対人関係からみた居場所」、「居場所の心理的効果」といった3つに大きく分類できるよう考えられた。このようにしてみると、学生にとって「居場所」となりうる安全・安心な場所があり、そこに学生や教員、またその場所に関わる人々との関係性がうまれる状況がある中で、学生自身が「居場所とそこにある対人関係」から安らぎや喜びなどを感じられる機会の提供を「大学の授業」が担うことができれば、そこに意義がでてくるように思われる。

今回は、「大学側が「居場所」を作る・提供すること」ということからの検討であったが、学生の主体性ということを考えた時、今後は大学側と学生側の双方向から居場所が生まれるような可能性やあり方について検討してみたい。

スライド1

第31回FD・SDフォーラム 第4分科会 You, Unlimited

Ryukoku University

## 大学の授業における「所属感・居場所」づくり (趣旨説明)

龍谷大学 心理学部 小正 浩徳  
 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 土居 洋平  
 龍谷大学 心理学部教務課 中尾 覚

スライド2

本分科会(ワークショップ)について

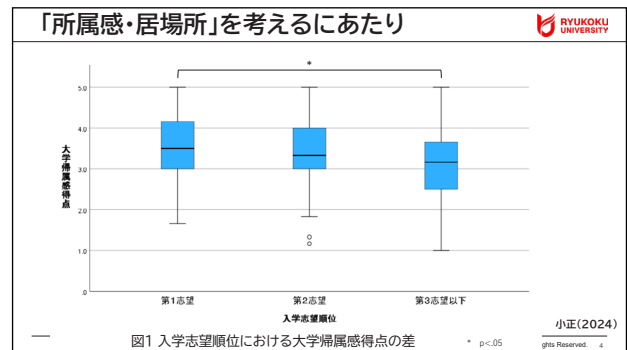
「中退予防」を考えたい(この大学に来たい気持ち)  
 「所属感・居場所」を考える(大学に「居場所」がある)  
 大学側が提供できる「モノ」があるのでは?  
**「集合知」を!**

スライド3

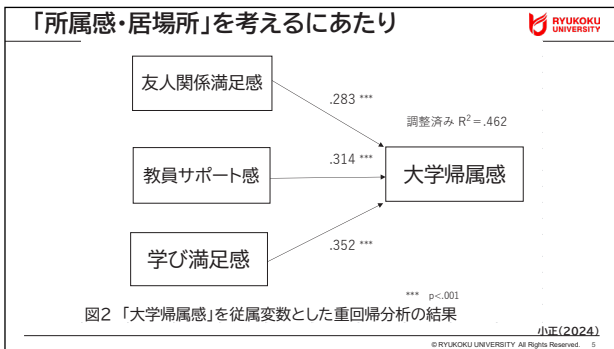
本分科会(ワークショップ)について

これまでの実践・研究のなかで  
 臨床心理士・公認心理師として  
 不登校・特別支援 → 社会(学校)で生活するための「こころ」を育てる  
 大学教員であり研究者として  
 大学生が次の「ステージ」に参加するための支援  
 → **「中途退学」の『予防』、「(この)大学に来たい」**  
 (この(龍谷)大学で成長できた、と思ってもらえる「関わり」)

スライド4



スライド5




スライド6

「所属感・居場所」を考えたい

「所属感・居場所」を考える(大学に「居場所」がある)  
 大学(側)が提供できる「モノ」があるのでは?  
 ◎ 『人間関係(教員・友人)構築機会』の「提供」  
 ☆ 『「学び」たい気持ちが育つ機会』の「提供」

スライド7

「所属感・居場所」を考えたい 

「居場所」って？


**個人的居場所**: 1人でのときの「居場所」

**社会的居場所**: 誰かと一緒にいるときの「居場所」

社会的居場所の確保と精神的健康とは有意な正の相関 石本(2010)

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 7

スライド8

「所属感・居場所」を考えたい 


大学生を見ていると

1人でのときの「居場所」も

誰かと一緒にいるときの「居場所」も

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 8

スライド9

文献 

石本雄真(2010) ころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所  
カウンセリング研究 43 (1) 72-78

小正浩徳(2024) 中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用Ⅲ  
2023年度自己応募研究・指定研究プロジェクト報告書 5-6

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 9

スライド1


**関係機会を増やす・関係性を太くする**  
 —跡見学園女子大学での取組み事例から—

2026(令和8)年2月28日(土) 10:00-12:30  
 第31回FD-SDフォーラム 第4分科会  
 大学の授業における「所属感・居場所」づくり 報告  
 担当 土居洋平(跡見学園女子大学観光コミュニティ学部/地域交流センター)

1

スライド2

**0. 自己紹介**

氏名	土居 洋平(どいようへい)	
所属・職位	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授 同 地域交流センター長 京都芸術大学大学院芸術研究科(通信) 特任教授	
専門	都市社会学・農村社会学・地域社会学 (地域の居場所形成・農村移住等を研究しています)	
所属学会	日本都市学会(理事)・関東都市学会(会長) 日本村落研究学会(年報編集委員)・地域社会学会等	

2


スライド3

**1. 本題の前に(1): 「居場所」とは?**

「居場所」と「居所」との決定的な違いは、居場所には価値が与えられているという点である。居ることが心地いい(快適)、居ることが許されている(承認)、居ることを求めている(願望)といった場合に、そこは居場所となりうる。」

祐成保志、「第8章 居場所の条件 コモンズとしての住まい」武田・祐成編、2023『コミュニティの社会学』有斐閣、p.187より

快適である場所  
居て良いと感じられる場所  
そこに居たいと思える場所





3

スライド4

**2. 本題の前に(2): 居場所を作る方法**

- ① (物理的にも精神的にも) 快適な場の形成  
 物理的: 実際に、快適に過ごせる空間の形成  
 精神的: 脅威・恐怖・不安を感じさせない場づくり
- ② ここに居て良いというメッセージの発信  
 物理的: 「居ること」についての肯定的な表示  
 精神的: 存在承認・尊重・役割期待と遂行...

③ **そうした関わりの機会を増やす／一つ一つの関わりを太くする**  
 ➡ ここに居たいと思うようになる

4

スライド5

**3. 授業での取組み(1) 講義科目にて**


- ① 快適な場の形成
  - ・集中または分散しすぎない工夫(教室サイズ・座席配置)
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
  - ・口頭で出席確認
  - ・リアクションペーパーに対するコメントの工夫
- ③ 機会の量・質の向上
  - ・講義科目でも、双方向のやりとりができる機会を設ける
  - 例: 毎回ミニ課題を授業内で実施・机上巡回でコミュニケーション
  - ミニ課題作成は「相談しながらやってよい」という形に
  - 課題を10人ぐらいで回し読みして相互評価をする・等

5

スライド6

**3. 授業での取組み(2) 演習科目にて**

- ① 快適な場の形成(省略)
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
  - ・個人々への役割の付与
- ③ 機会の量・質の向上
  - ・PBL的な共通の解決すべき課題の設定・克服に向けた検討・実践
  - 共同で同一の課題に取り組むことで、関係機会の量増加・質向上
  - 共同の場をつくることで、共同性・共同意識・所属感情は向上する
  - ・例: 社会調査実習: 同一対象地域について事前に調べる・議論する・調査を設計・交渉・実施・分析...所属感情は向上
  - ※ 但し、コンフリクトとその調整が必ず発生する




6

スライド7

### 3. 授業での取組み(3) 演習(ゼミ)にて

- ① 快適な場の形成
  - ・文系であっても、溜まれる物理的な場は大事
  - 学生グループ研究室の設置/教員研究室の開放
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
  - ・制度的な保証の表示・茶菓子等の提供
- ③ 機会の量・質の向上
  - ・共通のテーマでの議論・PBLの取組(演習科目に同じ)
  - ・課外活動等での共同実践・移動時間も含めた場の共有

※ 授業時間以外の拘束は年々困難に/希望制で活動を編成するなどの工夫が必要




7

スライド8

### 3. 授業での取組み(4) 補足

- ③ 関係性の量と所属感・居場所について
  - ・前任校(東北文科大学短期大学部(旧 山形短期大学))
  - ・学科80名定員×2学年(大学全体でも在学1000人以下の小規模校)
  - ・専任教員の持ちコマ:15(通年)
  - ・授業での他学科との履修者の重なりがほぼない
  - ・教室と同一建物・同一階に研究室を配置・指導教員の研究室が溜まり場
  - 所属学科の学生・教員が顔を合わせる機会が多い
  - ∴ 学生の感じる所属感・居場所感も高い
  - ※ ただし、人間関係が濃密な分コンフリクトも多い



8

スライド9

### 4. 大学・地域交流センターの取組み(1)

溜まれる場所を物理的につくる(大学)



9

スライド10

### 4. 大学・地域交流センターの取組み(2)

外部の溜まれる場所につなぐ(地域交流センター)



10

スライド11

### 4. 大学・地域交流センターの取組み(3)

所属感のある居場所となる既存学生団体を支援する(地域交流センター)

背景:コロナ禍前後での学生団体の活動停滞・弱体化(ノウハウの断絶)

課題:活動機会減少→所属感・居場所感の減少

対策:活動機会増大に向けた支援

→ 自治体・外部団体からの問合せ・相談 → 地域交流センターへ

センター内で対応できる学部・学科・学生団体を検討・調整・実施

事例:まちづくり学科ゼミナールが遠隔地自治体の地域振興プロジェクトに協力

観光デザイン学科ゼミナールがキャンパス近隣の観光振興イベントに協力

学生ボランティア団体がパラスリット講演会を学内で実施

大学祭実行委員会がキャンパス移転を見据えて移転先でイベントに協力 11

スライド12

### 4. 大学・地域交流センターの取組み(4)

所属感のある居場所となる既存学生団体を立ち上げる(地域交流センター)

背景:コロナ禍前後での学生団体数の減少

課題:活動機会減少→所属感・居場所感の減少

対策:活動機会増大に向けた支援=活動団体を新たに立ち上げる

→ 地域関連の学園資源を活用したプロジェクト設立・学生募集

外部団体・他大学と連携したプロジェクト設立・学生募集

事例:跡見「学芸員」in 菊坂(学園所有の文化施設(旧伊勢屋買店)を拠点に資料調査・地域貢献活動プロジェクトで学生を募集→学生団体化)

行こうよ!文京浴場♨️~学生プロジェクト~(文京浴場組合・拓殖大学と連携して区内銭湯を盛り上げるプロジェクトで学生を募集→学生団体化) 12

スライド 13

**4. 大学・地域交流センターの取組み(5)**

所属感のある居場所となる学生団体の発表の場をつくる(地域交流センター)

背景・課題(省略)

対策:学生団体の発表の場を用意する・評価する

→ 学生団体の共同作業・活動振り返り・モチベーション向上の契機として  
学内外で発表の場を用意する・表彰する

事例:文京区学生支援担当者連絡会主催・学生地域活動報告会  
(区内大学の地域関連担当者の会議で企画・区内8大学参加)  
本学独自の地域活動成果報告会  
(学内のゼミ・部活・各種団体に呼びかけ実施・学長賞等賞金有)

13

スライド 14

**5. 課題**

学内に広く募集する…といっても、結局顔ぶれはいつも同じ?  
二極化問題:特定の多く参加する学生/全く参加しない学生  
→ 多種多様な活動機会の提供で、ある程度は多様な顔ぶれになる?

個人差のある「ちょうどよい距離」「居心地の良い場」の感覚  
深い関わりは必ずしも求められていない/しかし、関わりがないと寂しい  
機会を提供しても、強制されたものと捉えられると「居心地の良い場」になりにくい  
→ 常にほどよい距離感形成について調整する意識を持つ  
機会は提供しても、希望する人が参加するという形式を保つこと…

大学の外で学生の安全をどのように担保するのか?  
外部でのハラスメント対策・人足のあるいは消費的な使われたかをどう防ぐか?

14

スライド 15

**参考文献**

跡見学園女子大学地域交流センター、2022、『跡見学園女子大学地域交流センターブックレット2 コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性』跡見学園女子大学地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センター、2024、『跡見学園女子大学地域交流センター 年次報告書ゆかり 5号』跡見学園女子大学地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センター、2025、『跡見学園女子大学地域交流センター 年次報告書ゆかり 6号』跡見学園女子大学地域交流センター

ささちゃんち運営委員会、2024、『文京 まちの居場所案内』ささちゃんち運営委員会

祐成保志・武田俊輔編、2023、『コミュニティの社会学』有斐閣

土居洋平編、2018、『平成29年度 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 社会調査実習報告書 山形県西村山郡西川町大井沢の暮らし一介選:交通・農業・女性・移住・地域づくりについて』跡見学園女子大学

文京建築会ユース、2019、『ニュー井戸端 ご近所のまち開きスポットを探せ! in 文京』文京建築会ユース

15

# 中尾 覚 龍谷大学 心理学部 教務課 兼 文学部 教務課 職員

スライド1

大学コンソーシアム京都 FD・SDフォーラム You, Unlimited

Ryukoku University

学生による学生のための「居場所」づくり  
学生コミュニティの立ち上げ・運営をととして

2026年2月28日  
龍谷大学心理学部教務課 中尾 覚

スライド2

自己紹介

中尾 覚 (なかお さとる)  
龍谷大学 心理学部教務課 兼 文学部教務課

2023年～  
教授会、入試、広報、学生生活、障がい学生、教務、電算…

スライド3

龍谷大学心理学部の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
心理学部	心理学科	学士 (心理学)	255名	10名	1,040名

※1・2年次：深草キャンパス / 3・4年次：大宮キャンパス

文学部臨床心理学科を前身として、2023年度に新設。  
公認心理師受験資格課程を設置。  
データサイエンス、キャリア教育にも注力。

※2025年度には文学研究科臨床心理学専攻を前身として、  
心理学研究科臨床心理学専攻を新設。

スライド4

学生コミュニティ立ち上げの経緯

心理学部は新設学部で1期生しか先輩がない(2024年度時点)。  
これからの専門的な授業や学びのことを開ける関係性が希薄。  
→サークルではなく、心理学部の中で先輩・後輩のつながりを作ってもらいたい。  
これから入ってくる後輩にも心理学部の楽しさを伝えてもらいたい。  
(新入生歓迎イベントやオープンキャンパスを手伝ってもらいたい…)

↓

学生同士の学年の垣根を超えた交流を目的とした  
学生主体の活動団体

学生主体で活動内容を企画、立案、運営し、  
学年の垣根を越えてコミュニケーションを図り、  
「たて×よこ」のつながりを創出する

スライド5

学生コミュニティ立ち上げの経緯 (学生向け)

心理学部を盛り上げていきたい！でも学生が楽しくなければ盛り上がりがない！  
その中心は？学生でしょ！！

**学生が持つポテンシャルを発揮してもらえる場を作ろう！**

心理学部学生コミュニティ「team彩」とは  
一つのコミュニティ・プラットフォーム。  
学生同士が自由に交流し、自由にプロジェクトを企画・立案し運営することのできる場所。  
大学行事等における企画・立案・運営もありますが、それだけを行う集まりではなく、心理学部の  
学年の垣根を越えた交流を目的として「こんなことする/したいけど、参加する人この指とまれ」の  
活動を創造する場所です。  
team彩から様々なものが創造され、team彩の内・外に広がっていく。  
そのような活動の場になればと願い、立ち上げました。

スライド6

team彩について

心理学部

team彩

4年生  
3年生  
2年生  
1年生

心理学部生

サポート  
コーディネーター

教職員

1～3年生合計で約100名が所属しているが、  
実際に活動に参加できているのは  
60～70名ほど・・・  
→それでもOK！

教員：学生生活主任、学生生活  
担当の教員を中心に  
職員：教務課(私)

スライド7

参考：他の学生団体

文学部：学生支援サークル

経済学部：ピア・サポーター


法学部：学生広報団体、クラスサポーター

政策学部：学生広報団体、クラスサポーター、正課外活動

入試部：アドミッション・サポーター

キャリアセンター：キャリア・サポーター

オープンキャンパスでの企画や運営を職員とともに担っている。深草・大宮・瀬田で活動。代表や副代表、各活動班が充実。



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 8

スライド8

team彩の活動

年間行事 企画活動

- 新入生歓迎会/相談会
- 夏のオープンキャンパス
- 履修相談会
- team彩交流会
- 心理学会企画運営サポート (新入生交流会、学会講演会)
- team彩メンバー募集企画 など

全員参加型

ボトムアップ 自由企画活動

やりたい企画を自由に立案・企画・運営する活動

例) 心理学勉強会


バーベキューなど交流会企画

ボランティア企画

心理学部を盛り上げる企画

心理学研究プロジェクト企画 など

自由参加型




© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 9

スライド9

活動のルール

- メンバー間での積極的なコミュニケーション。
- 互いを認め合い、多様なアイデアが出せる環境づくり。
- 学年の垣根を超えて互いを支え合い、心理学部全体を盛り上げる。
- 交流の場であるミーティングには積極的に参加する。



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 10

スライド10


1年間の活動成果と今後の展望・期待

【活動成果】

- 3年生、2年生を中心に新入生交流会や相談会を実施できた
- 学年の垣根を超えた学生の「たて」のつながりができた
- 同学年でもこれまで交流のなかった学生の「よこ」のつながりができた
- オープンキャンパスでは受験生に向けて心理学部の学びをリアルに伝えることができた
- 1年生は新入生交流会での先輩の姿を見て「team彩に入りたい！」(先輩の姿を見て意欲・憧れを持ってくれる循環)

【展望・期待】

- 就職活動や大学院進学など、心理学部生ならではの悩みや相談ができる企画を考えて欲しい
- 1期生卒業後は同窓会の中心メンバーを担ってもらいたい
- 社会人になってもteam彩や現役の心理学部の学生とつながりを持ってほしい



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 12

スライド11

心理学部独自の取り組み

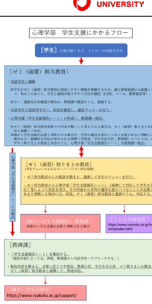

○学生支援報告シート

ゼミなどで欠席が続く学生、一定のフォローが必要な学生について、ゼミとりまとめ教員や学生生活主任へ情報を共有し、教務課も一体的に学生を支援していくフローを構築。

→ゼミ担当教員が面談等を通じて、当該学生の学生生活や困りごとを把握する。

※報告シートにおいて、当該学生の状況を集約している。

適宜、こころの相談室や障がい学生支援室へつなげることなど、学生の修学が継続できるよう教員・職員が連携している。

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 13


スライド12

team彩は学生の居場所・・・？

大前提：大学の中に居場所はさまざま。1人でも過ごせる。


team彩の活動を通じて感じること・・・

- 学生同士のつながりがあると、そのつながりが居場所に →いつものメンツがいる安心感
- チームとして動いていれば、組織が居場所に このチームの中で、このメンバーと「なにかやりたい、なにか始めたい」



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 14

スライド 13

学生の居場所について 

個人の意見としては・・・  
大学は“義務教育”ではない＝自主的に学び、成長していく場所  
「自己責任」のもとで学生は学んでいくべき

ただ・・・  
学生が大学に来ることができない、大学に来て「居場所（≠物理的）」がないと感じている学生が多い？  
→学生がいかに安心できる場を作るのが課題  
※相談できる教員、相談できる職員・・・

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 15

スライド 14

